

これまでで最も古い大正10年の蔵王の アイスモンスターの写真が見つかりました

山形大学学術研究院 柳澤文孝

1. はじめに

大正10年1月の蔵王山巣冬期初踏破の紀行文とその際に撮影された蔵王の「アイスモンスター」の写真が慶應大学山岳部「登高行」第3年（大正10年6月出版）より見つかりました。「アイスモンスター」についてこれまで最も古い、蔵王の樹氷が有名になる前の、写真です。

さて、「樹氷」には二つの種類があります。一つ目は、「エビノシッポ」ともよばれているもので、過冷却水滴の着氷によってできます。明治6年の第一回万国気象会議で定められた Silver Thawを明治9年頃に和訳したもので、世界の山岳地帯で見られます。二つ目は、「アイスモンスター」ともよばれているもので、アオモリトドマツ（オオシラビソ）へ付いた着氷と着雪が結合して氷となることができます。「アイスモンスター」は大正3年2月15日に蔵王冬季初登頂した神山峯吉らによって発見されました。発見当時は雪が凍ってできると考えられて「雪の坊」や「雪瘤」とよばれています。一方、「エビノシッポ」についても雪が凍ってできると考えられたことから、「アイスモンスター」は「エビノシッポ」がアオモリトドマツ全体を覆ったものだと誤解されて「樹氷」とよばれるようになりました。なお、「アイスモンスター」が着氷と着雪が結合して氷となることでできていることが分かったのは1960年代の終わりになってからです。

「アイスモンスター」は日本でしか見ることができません。それは、「アイスモンスター」の生成に、アオモリトドマツのような常繁の針葉樹が必要なこと、一定方向の季節風や風速・気温といった様々な気象条件が必要なためです。かつては北海道の羊蹄山などや長野県にある志賀高原

の横手山や菅平の根子岳でも見られていましたが、温暖化に伴い、1970年代以降は東北地方の一部の山岳地帯（八甲田・八幡平・森吉山・蔵王・西吾妻）でしか見ることができなくなっています。

2. 蔵王冬期初踏破と「樹氷」の写真について

これまで、蔵王山巣冬期初踏破は大正10年の慶應大学山岳部ということはわかつておりましたが、踏破を急いだため「アイスモンスター」には気がつかなかったとされておりました。その後、初踏破時にアイスモンスターの写真を撮影したとの論文（三田幸夫1973山溪）が見つかりましたが、写真の所在についての記述はありませんでした。

一方、「エビノシッポ」は石崎光瑠氏の大正10年（山岳）、「エビノシッポ」と「アイスモンスター」と中間的な物は榎谷哲藏氏の大正13年（山溪）、「アイスモンスター」は昭和2～3年の鉄道省などが最も古い写真であると考えておりました。

その後、慶應大学山岳部の部報である「登高行」を調査し、蔵王山冬季初踏破の際の紀行文と、その際に撮影された「アイスモンスター」の写真を見つけることができました。

3. 新資料について

大正10年6月発行の慶應大学山岳部年報「登高行」第3年（図1）に早川種三氏の「冬の蔵王越え」と題する紀行文（図2・図3）と行程についての記載（図4）があり、鹿子木員信（かのこぎかずのぶ）先生と学生7名が大正10年1月8日に峨々温泉から地蔵嶽を経由して高湯温泉へ踏破したことが記されていました。また、初踏破に参加

冬の藏王越え

卷之三

東北水經白石驛

早川種三

藏王山をスモーで登つて見あとと計画がされた五色温泉は正月三日に熱さも行舞の研などを相成りしかつた時に荒子木先生が城下を起きて山形まで行つたのである。尚ほ一層急切であらうと云はれたので吾々もその氣になつて然るの場で平穡えようと決心したのであるが野郎故むくは夏も一二度登つてゐるが、あれはあつたが高湯温泉まで下る事は夏に一度しか行つてゐないので多少不安があつた。それで用事があると大分不充分であつた。

今年は雪が少ないので升とも大分心配したので先と先森は五色温泉に止まれる所だけ遠田町まで先行き雪の有無を電報で知らせる所にして正月前半時二十九分の汽車で板谷駅を立つた。

白石驛には二時に着き驛で先輩と落合ふと勝利の乗合自動車でスキーや河豚の腹の様に強切つて来る。

ヨニタクを自効軍の踏場やエンジンに結びつけ
て田舎町を走らし、白石の町を出てから暫く白石
川の北側に沿ひ天気もよく暖かいのでスキーチで登山
する様な気持はなく自動車のエンジンの音を聞きな
がらウト／＼したり然然石に車がつらあたり身障が
投げ込まれそうになつたりしながら四十分ばかり走ら
した。桃源の宿村を出しが生憎冬で機内にも
ありつけない銀木林の様な焼薪を積みて眺めながら
ら松川の橋にさし掛つた丁度其時は空は一瞬晴れ
巖王の遠山は雪につゝれてそれが太陽の美しい光
をうけて明らかに空の藍色と區別されて諸々しく輝
いて成立して見る度も銀の街観の如きあの姿を見た
時は吾々は二三日中にあれを実感するんだ然もスキ
ーと云ふ風にを感じ今迄の良閑なだれ氣味も一時
に緊張した、もう吾々の心は巖王のスロープにあつ

2

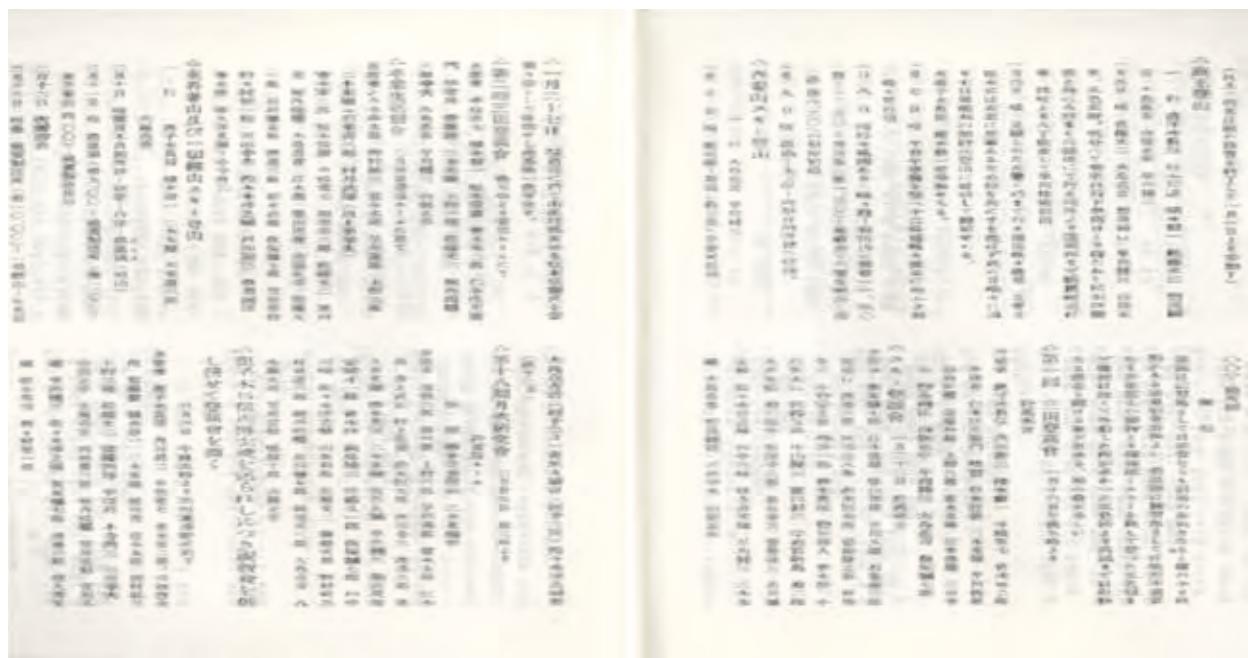


図4

した豊邊國臣氏が撮影した3枚の写真（図5・図6・図7）も掲載されており、それらには「アイスモンスター」が写っておりました。「アイスモンスター」について、これまで最も古い写真です。

また、紀行文には「夕光のかすかな光が尾根の樹氷のみを輝しかけた頃に明日来る事を約して……真暗な森道を木根に躊躇ながら七時半過ぎに（峨々温泉から遠刈田）牧場に帰って来た」、

「神社は銀で作られる而もその銀雪は風の為に一面に銀の針を描してある様に思はれる」との記載があります。前者は標高1300mの賽の河原付近から1800mの蔵王山山頂を見上げた際のもので、後者は目の前にある物についてのもので、前者が「アイスモンスター」で後者が「エビノシップ」と考えることができます。紀行文では「エビノシップ」を「樹氷」とは考えておらず、「アイスモンスター」を「樹氷」とよんでいることになりますが、直接よぶような表現とはなっていません



図3

んでした。また、「三寶荒神山と高湯温泉に続く尾根は「しらべ（シラビソのこと）」の森林を以て覆われているのが見える。三寶荒神山と地蔵嶺の鞍部の森林は全く雪に覆はれて結氷してサンタクロースの森の如き感を懐かせるこの大森林は生きている様に風に吹かれて力強く動いている」との記述があります。「樹氷」を「エビノシップ」といった一部分ではなく樹木や森林といった群や塊で見ており、「アイスモンスター」を「樹氷」とよぶといった名称もまだ充分には確立していないことが分かります。また、大正10年当時、「樹氷」はアオモリトドマツを覆った雪の結氷ができると考えていたことも分かりました。

大正10年は、蔵王の「アイスモンスター」が全国的に有名となる前のことです。大きくて重いカメラを持参していることから、記録を目的として、準備をして来ていることはわかりますが、初踏破前から「アイスモンスター」を知っていたかどうかまでは判断できませんでした。また、これ

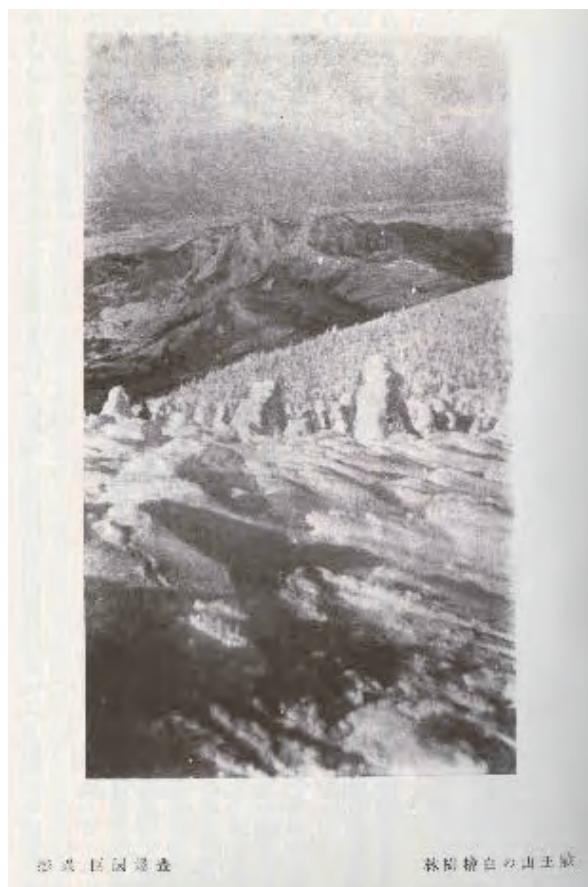


図5

までいわれてきたように冬季初踏破に集中していたため、「アイスマンスター」を見ていなかったわけではない、ということが分かりました。「登高行」によって、蔵王の「アイスマンスター」が広まるきっかけになったと考えられます。

なお、同誌によれば、同山岳部は蔵王初踏破の後、五色温泉に移動し、大正10年1月から3月に

かけて、家形山・東大嶺山などにも登頂しています。季節から考えますと、そちらでも「アイスマンスター」に遭遇したと考えられますが、記述や写真はありませんでした。

また、1957年に出版された「登高行」の15号(図8)には鹿子木員信による冬季初踏破の回想録が掲載されていました(図9)。



図6



図7



図8

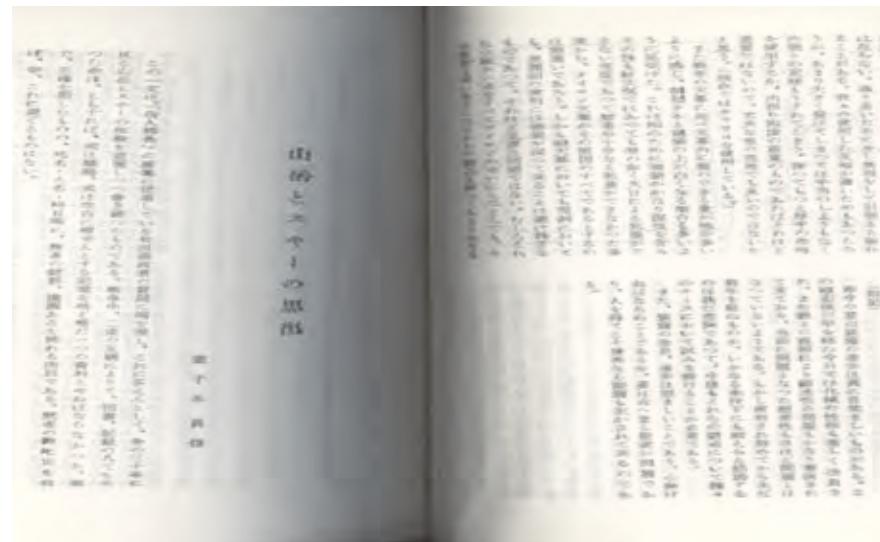


図9